

## <共同研究報告> 『太陽』誌上における<農業>欄

著者	藤本 寿彦
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	15
ページ	139-148
発行年	1996-12-27
その他の言語のタイトル	"The Agricultural Column in the Magazine 'Taiyo' "
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00000791">http://doi.org/10.15055/00000791</a>

〈共同研究報告〉

『太陽』誌上における〈農業〉欄

藤 本 寿 彦

『太陽』の〈農業〉欄は博文館刊の雑誌『日本農業雑誌』を継承しているが、<sup>(1)</sup>『太陽』発刊（明治二十八年一月）の際、〈農業〉欄創設の意義に就て付けた小文がある。

耕播、牧畜、養蚕、山水、塩田等に関し、中外の新現象を採りて必要有益の事項を記述し、以て勸業富国の一端に供し、亦以て当業者を警醒誘掖するところあらんと期す

同欄は明治二十九年に至って〈実業〉欄に編入され、〈農業界〉と改称。博文館が『農業世界』を創刊するにもなつて消失

する。〈農業〉欄創設時の有力な農学者は農科大学教授、横井時敬であつた。横井は「農業教育に就きて」（『太陽』明治二十八年一月）において、小農・集約農業政策と日本に適合した科学的な農業技術の必要性を説いている。〈我が農業は労力に集約なり、彼の農業は大農法に由り、我が農業は極小農法を用ひ彼我の相合ざる〉、〈応用科学に至りては、応用すべき事業の各国相同からず……況んや農業の如きは、其業術氣候土質天然力の制裁を受くること大にして〉という日本農業觀に立脚し、〈勸業富国〉に則つた農業改良を推進していこうというのが、横井の立場であつた。このよう

な日本農業に対する認識は、彼が大正末期になつて理事長に就任する大日本農会のイデオログと重なる。

へ……固有の農業国たるを失はすして益々之に奨励を加へ保護をなし国家經濟の大本を鞏固にし傍ら商業、製造、運輸の擴張に怠らざるは実に国家の長計にして……而るに欧米各国の農業は概ね器械を使用し所謂粗大農なれば本邦の集約農に比すれば同量同数の農産物を獲るの労費少なく動もすれば本邦の農産物を圧倒せむとす否な業に已に綿花の如き砂糖の如き藍の如き茶の如きは其影響を蒙る尠少に非ずして我農業者の困難なるは掩ふへからざるの事実なり、

へ農知識の上進を図る為には国立各種農学校の設けとなり、へ農政上の勸奨法としては農産物に係る海關税の免税若くは他国よりの輸入品に重税を課する（『大日本農会の冀望』）。小規模な農地、その反当たり<sup>(2)</sup>の收穫量を高める集約的な労働力、そして農業技術の向上化、さらには農業保護政策をワンセットにした小農主義は、日本農業の方向を決定づけていく。横井時敬は生産農学の權威者として農学発展のために寄与している。そのうち「塩水選種法」は画期的なものという評価がなされているが、「塩水選種法」は小農法においてのみ有効であった。<sup>(3)</sup>それが米作の改良であったことが示すように、横井の日本に適合した科学的農業技術とは主として米作にかかわるものであった。<sup>(4)</sup>

その横井は「農業經濟に関する觀察の誤謬」（『太陽』明治二十九年三月二十日）において、明治十九年から二十六年にわたる「地租五円以上を納むる者の累年比較」という資料を提示し、地租五円以上を納める

農家が減少したことを指摘し、中等地主の没落と農地の大地主集中という現況に対する喚起を促している。この分析に基づき、「土地兼併救済策」（『太陽』明治二十九年六月五日、二十日）を執筆し、イギリスにおける大土地所有の弊になぞらえ、へ小作小農なる彼の窮民、之れ豈に國家の柱石、干城として、頼むべきものならんや、看よや、英國の土地は、少數の大地主に吸収し去られて、貴むべき愛すべき、國家の元氣として頼める昔日のイヨーマン（自作小農）等は、今は独り歌人の追懷に跡を留めて、代はるは無数の蠢爾たる雇作者あるのみ、小作小農は實に是れ彼の雇作者と撰ぶなき自暴自棄の窮民たるに過ぎず、土地兼併の弊、一に此に至る」と論じ、土地を所有する自作農を最も健全な社会階級と規定し、そうした自作農が構成する農村こそが食糧確保と忠良な兵士を生み出す場と考えている。<sup>(5)</sup>こうしてみると、『太陽』は没落しつつある自作農を「富国強兵」の礎として捉え、米作に従事する彼等の生活向上に

つながる農事改良や政策提言をした横井時敬に誌面を与えることで、井上馨——フェスカによる大農政策に対して、一定の距離を置いたことがわかる。

井上馨とフェスカの主導による大農政策に対する批判として登場した小農政策は『日本人』で展開され、大日本農会と連動するようにして深化していく。今外三郎「大農論」（『日本人』明治二十一年十月三日）はその一典型で、へ然れば仮に同伯の大農主義を今日の水田に応用するとせんか、元來稻ハ灌溉法の善惡に依りて其成長を異にするものなれば、此法に於ては非常に注意を要すべきものにして、へ水田に機械を使用する能はざるを思はゞ、却て其不經濟なるを發見せん、事情此の如し井上伯の大農主義は決して之を贊成すべきものに非ず、へ彼の泰西の学士とて尊信せらるゝ人物が突然我國に来て農業を論ずれば、直ちに器械の利用土地の拡大を奨説して止まざるを聞けり、……是を以て器械使用の利を説くよりは、寧ろ肥料の撰択を論ずること、

今日並に将来の農業に頗る要用なるべけれ、実に然り若し徒らに彼れ欧米人の説く処に従ハば、此国の運命を如何せん」というのが要旨である。ここにおいても、日本農業は小規模経営、米作ということが前提として存在し、米作による食糧確保という『日本人』の国防認識を揺がす大農論、それを推進する欧化主義なるイデオログへの批判がはつきり見てとれる。

ところで、今外三郎は「大農論」において、<sup>(8)</sup>「耕作すべき作物の種類によりてハ、時としては井上伯の謂ハるゝ如く、地面を廣大にするに於て害なきことあり」と論述しているが、井上馨——フェスカの大農主義はそもそも米作中心の農業プランではない。桜井武雄は「特に畑作、牧畜等各種殖産の勸奨策が叫ばれた」と要約しているが、<sup>(9)</sup>『大日本農會報告』明治二十一年十一月に掲載されたフェスカの「農業改良按」に、大農主義の大枠が読み取れる。フェスカはこの論文において、日本農業の生産コストの高さに触れて、<sup>(10)</sup>「顧ふに前六年間日本の

輸出総額は三千万円乃至三千六百万円に至れり……海外輸出に係る農業上の全生産物の価額は貳千五百万円を越ゆるならん……此価額たるや之を農業的生産物の総価額と比較するときは実に少小なりとす」と分析し、作物の品質管理や価格といったマーケティングの側面から小農から大農への移行を説いている。フェスカが想定した日本農業は世界の自由経済市場の中で位置付けられ、農作物の価格及び品質競争を生き抜く農政として大農主義が待望されたわけである。

だが、大農法を導入した農業経営は次々に破綻していった。その事例を挙げてみる。

#### 北海道蜂須賀農場

明治二十二年開始。「本農場経営ノ始メニ当リテハ動物及機械力ニ依リ自作経営ヲ行ヒ之ニ若干ノ小作ヲ加ヘ農業並畜産ヲ以テ其ノ目的トナシ着々事業ノ進捗ヲ計リシモ、当時本道ノ戸口小數ナルニ偶々明治二十七八年ノ日清

戦争ノ為農場内ニ労働者不足ヲ生シ事業甚タシク困難ヲ来シ移民ヲ收容小作制度ニ依リ之カ開墾ヲ企圖スルノ止ムナキニ至レリ」<sup>(9)</sup>

#### 千葉県湿津村開墾地

明治初年より津田出が「馬耕ニ依リテ着手シ、明治二十年頃ニ至リテ百三十町歩ノ畑地ヲ得、此処ニ桑樹ヲ植付ケ一面乳牛ヲ飼養シ、蠶畜ノ経営ニ全力ヲ致セリ、然レトモ當時未タ之等ノ需要盛ンナラサリシヲ以テ予期ノ成績ヲ挙クル能ハス明治二十五年ニ至リ所有地ヲ挙ゲテ」売却し小作開墾の法に移る<sup>(10)</sup>

畜産、畑作を中心とする大農法は日清戦争といった予期せぬ外交要因や未成熟なマーケットのために短期間のうちに破綻し、小作耕作に頼る大規模寄生地主の経営へと変質していく。<sup>(11)</sup>アメリカ式大農経営の困難を体験を通して論述した「北海道におけ



る曾我子爵の第一農場」が『太陽』明治三十二年十一月に掲載され、井上馨——フェスカ主導の大農主義の失敗がマス・メディア誌上で明らかになるのだが、だからといって『太陽』が大日本農会及び『日本人』の国粹主義的イデオログに組していたことにはならない。

『太陽』創刊号掲載の矢部規矩治「本邦の氣候と作物の分配」はフェスカの立案した、

第一 南部半熱帯 棕樹、寄根甘蔗、

第二 北部半熱帯 黒松、常緑櫟、厚

皮香、甘藷、綿、

第三 温帯 山毛櫨、落葉櫟、楓樹、

穀物、馬鈴薯、

第四 白檜帯 農作の北部境界

第五 偃松帯 樹木の極界

という農業植物帯地図を援用しながら、氣候に適合した農作物の栽培を説いている。その背景には米作を強制した近世農業から、栽培作物の自由選択へとシフトした明治農

政の現状があった。<sup>12)</sup> 矢部は自由な商品経済下における農業生産を想定し、近代的な日本農業の方向性を探ろうとしたのである。

それが国外のマーケットをも視野に入れていたろうことは、当時、農商務次官に在職していた金子堅太郎「農工商高等会議開設の理由」(『太陽』明治二十九年十一月二十日)の「我が国の農産物及製造品を海外に輸出して、大に外国貿易を拡張せんとするの思想を惹起したり、是れ今日国家の経済を計画する為め、海外貿易の拡張は一日も忽せにすべからざる所以なり」に照らしても明らかである。さらには「旧来の農業の方針を一変し、其数量を以て競争せず、品位の精良と同一なるを以て其貿易を維持し、以て国家の経済を経営せり」という文脈には、品質管理によって世界の農産物市場における自由競争に対応しようとする姿勢がみえる。横井時敬らの大日本農会の主張であった農業産物の関税保護<sup>13)</sup>は打ち出されていない。上野英三郎は「世界糖業の大勢下」(『太陽』明治二十九年九月五日)で砂

糖大根の関税問題に言及し、「諸国久しく輸出賞与の政策を取り、国民利害の關係其の平を得ず、保護干渉は其極に達し、弊害已に顕然たるものあり」と、間接的ながら関税保護政策に対する批判をにじませている。その上野英三郎が『太陽』明治三十五年五月五日号に、「器械応用の農業上に於ける影響」を寄稿し、「工業の労働者を農界より奪ふあるに至りては、農界は器械の応用を以て之に對し、器械の応用は耕作地を大にするを得べく、作業の精時に之を求め得べく」という小作農民の都市流失に対応する施策として大農主義が展開されている。

『太陽』の「農業」欄は、このように見えてくると、横井時敬と矢部規矩治・上野英三郎に代表される二つの農政論の流れが存在したことが指摘出来る。異質な日本農業観を有する執筆者を並置する編集方針は、小農主義の論陣を張った『日本人』に対して、当代における知の総体を提示することになったと思われる。

\*

さて、〈農業〉欄の特徴は科学主義である。「砂糖精製に於ける電氣の利用」(明治二十八年十月五日)、「農業上電氣の応用」(明治三十年五月五日)、「駆虫剤の使用法及製造法」(明治三十年八月二十日)、「植物塩基の種子発芽及び発芽に及す効力」(明治三十年十一月五日)、「電氣と種子の発芽」(明治三十一年三月二十日)という項目名からも農業技術に対する電氣、化学の応用が見て取れる。例えば『農業世界』(明治三十二年八月)の目次「植物人工交種法」「肥料の効能」「土壌内の『バクテリア』(承前)」「乾酪に就て」「樟樹培養実験録」「動物屍体の利用」「麦の黒奴予防法」「里芋の貯藏法」と比較すれば、いかに『太陽』の科学主義が際立っていたかが窺える。<sup>14)</sup>『農業世界』は篤農家が農業技術を交換し合う「問答」欄を開設していたことで明らかなように、単一作物を地域ぐるみで栽培する名産地化が進展するなかで、実地に則した農業知識と技術が待望されていた。

た。『農業世界』はそのような日本農業の現状を踏まえた情報誌であったと評してよい。

へ一反歩毎に肥料を用ふるの多寡は作物により土地により多少の差なきにもあらざれども、……我小農に取りて甚だ軽からざるの負担にして<sup>15)</sup>という現実であったのだから、『太陽』の〈農業〉欄における農業技術及び知識が実用化される可能性は薄かったに違いない。このコラムは『農業世界』の「問答」欄と異なり、電力及び化学工業サイドに立脚しており、新たなそれらの需要のターゲットとして、農業が照らし出されたことを示してはいないだろうか。

さて、『太陽』の〈農業〉欄において留意すべき情報は輸出産品に関するものである。当代の有力な輸出農作物は生糸、茶などだが、その一つに百合がある。『百合鑑』なる百合の品種と栽培法を記した小冊子が明治二十七年九月に耕牧園より刊行されるほど、国内の百合栽培熱が高まったが、『百合の栽培』(『太陽』明治二十九年一月

二十日)からは百合栽培の加熱ぶりが伝わってくる。

百合は海外に於て其花を觀賞することとなりたる以来其塊根の輸出年々増加し之が栽培は今や一大有益事業となれり、蓋し百合の如きは重要農作物と見做す可きにあらざ、且其目的たる単に賞花用に止まるものなれば其需要額に制限あるや明かなり、然るに此を之れ慮らず、漫りに其生産を増大にし重要作物の栽培を妨ぐるが如きあらんか、其損失甚だ恐る可きものあらん、然れども今日に於ては一の有利なる作物たるなり、又其輸出額に至りても将来尚増加の形勢あるあれば、茲に其栽培法に就きて大要を記するあらんとす、  
(以下略)

中村勇「百合栽培法」(『農業世界』明治三十三年五月)には横浜港から輸出された統計表が明記されている。明治二十四年次

の輸出額二万六千六百三十九円、明治二十九年次では十万二千二百八十九円、明治三十二年次は二十八万九千八百九十五円に上昇し、百合の種類も「竹島」他三十九種が紹介されている。「百合栽培」の執筆者は百合栽培の流行に対し、へ漫りに其生産を増大にし重要作物の栽培を妨ぐるが如きあらんか、其損失甚だ恐る可きものあらんと批判しつつ、へ輸出額に至りても将来尚増加の形勢あるあればとして追認する態度を見せているが、ここには国益をめぐる認識の分裂と論理的糊塗の有様が露呈している。

商品経済の原理に則した農民の自由な作物選択が米麦を中心とする穀物生産の障害となることへの危惧と、外貨獲得という期待が綯いまぜになっているわけであるが、注意しなければならぬのはこの論者の国益に対する認識の中で、農民に対する目差しが欠落している点である。

百合の栽培熱は明治という近代が生み出したブームであった訳であるが、落葉松林

もまた当代の林業行政の負の産物であった。今日、落葉松林は人工林であることが忘れ去られている程、なじみ深い景観となっている。井出孫六は『風変わりな贈物』（一九九四年一月、新樹社刊）において、信州佐久に自生する落葉松の実を採集し苗を育て、人工的に植林することを松本谷吉と清水清吉が思い立ったのが明治九年であり、その事業を継承した井出喜重が落葉松植林に情熱を傾けた理由について、井出喜重の「植樹に対する自己の所信を述べて世の同志に訴う」に求めている。へ——工業の発達は木材の需要となり、木材の需要は山林の濫伐となり、山林の濫伐は水源の枯渇となり、土地の荒廃となる。わが国、維新以来、諸種の事業の勃興とともに、地方における鬱蒼たる森林はようやく禿山緒嶺の観を呈し、年々歳々、多額の治水費を要するに至り、気候の変調、土壌の崩潰、数えくれば寒心に堪えざるものあり。山野の整理、林政の振張、刻下の急務に非ずして何ぞ。——という近代林政に対する批判は、

『太陽』誌上にも登場する。白河太郎「水害と森林」（『太陽』明治二十九年十月二十日）には、農科大学林学部卒業後、山林局に奉職した彼の山林荒廃に対する深い憂慮が感取されるが、それは望月常「熊沢蕃山の経林策」（『太陽』明治二十九年十一月）があらわれることで、近代的な森林法の不備を、陽明学に基づくへ山川は国の本なりといひ、山荒れ川浅くなれば、国の大荒なりといひ、仁政を行へば昔の山川に復帰すべし」という経林策と対置させて浮き彫りにしている。<sup>(17)</sup>

山林濫伐による森林荒廃、それに伴う水害の瀕発という状況が、植林材としての落葉松の需要を高める要因となったことは、伊藤孜耕「落葉松の栽培を勧む」（『大日本農会報』明治二十九年六月）に力説されているところだが、『太陽』誌上に落葉松に関する記事が登場するのは明治三十五年のことである。無署名「落葉松栽培法」（『太陽』明治三十五年十一月五日）がそれである。落葉松の植林はへ板材となすには不適

当なりとするも土木用材、水中用材としては甚だ好く適し殊に鉄道枕木としては好良の材なり且つ此樹は他の松類と異り能く真直に伸長し大材を得易き性あるを以て近來世人の注意漸次此樹に向ふに至れり之れが爲めに其価格の如きも近年頗る昂騰し殆ど杉檜に能く匹敵するに至れるものゝ如し」という文脈が示すように、当代の流行と化しつつあった<sup>(18)</sup>。

この落葉松が近代文学において、どのように風景化されたのかを素描してみよう。

浅間山麓の落葉松林は北原白秋「落葉松」(『明星』大正十年十一月号)の原風景となったことで知られているが、岩井伝重『軽井沢町志』(昭和二十九年、軽井沢町志編集委員会)に拠れば、軽井沢地区の落葉松植林が本格化したのは明治二十年頃のことである。へ移植より二十年目には長三四丈に伸長(伊藤孜耕「落葉松の栽培を勧む」)する樹性であるから、この時期に植林された落葉松が形成する樹林が白秋の詩的感性を捉えたと考えてよい。

ところで、大正十年前後において、新しい風景として立ち現われた落葉松は概して文学者の関心の外にあったと考えられる。

興味深いのは大正初年代に浅間山麓の池西庵で避暑生活をしていた幸田露伴、娘・文のケースである<sup>(19)</sup>。娘がこの新しい林に感性を揺がす意味を嗅ぎ取ったに対し、父・露伴は見事に捨象しているのである。この事実は落葉松の風景化のあり様において、世代間の断絶が存在していたことを示唆している。幸田文が落葉松林の静寂に対して受けた印象は白秋の対極にあるといつてよいのだが、それは落葉松林に漂う孤独をおのれの実存に照らして共有するか否かの相違であろう。それはともかくとして、白秋も幸田文も静寂の風景として落葉松林を受容したことは変わりない。

先程、大正十年前後において、落葉松林が概して文学者の関心の外にあったと記したが、若山牧水『くろ土』(大正十年三月、新潮社刊)に大正七年作として、「この山の落葉松林わかければもみぢのいろのやは

らけく見ゆ」が収録されている。『明星』にもいくつかの例が指摘出来る。まず、

『明星』大正十年十一月号掲載の与謝野晶子の短歌「わが思ひ浅間が嶽の麓なる落葉松の木が知るよしも無し」、同年十二月号掲載の平野萬里の短歌「唐松の林の掩ふ高原に夕やけすれば海をこそおもへ」、大正十一年一月号掲載の西村伊作「明星の家(其一)」<sup>(20)</sup>、大正十一年七月号掲載の荻野綾子「落葉松の若き緑の林をばゆきつつ思ふ己が世の旅」などである<sup>(21)</sup>。だが、落葉松の詩趣が白秋の作品によって、『明星』内に浸透していったとはいいたい。白秋の「落葉松」の影響が窺えるのは、荻野綾子の短歌のみであつて、「落葉松」は類を見ない作品なのである。へこの作品など、白秋の詩にめづらしく、自然の実相のかすかな奥深い趣きをとらへた、佳作であるといつてよい」とは吉田精一の批評である<sup>(22)</sup>が、白秋の新幽玄体の代表作として評価が高い。だが、当代においてはへ安価なる自然嘆美に墮しへ平凡微温なる自然礼拝としか

受取れない。この思はせぶりの浅薄なる

自然陶醉は、この雅文調と相俟つて、詩壇がこれまで歩めるものに逆行する時代錯誤の産物である」という悪評によって迎えられた。引用文は白鳥省吾「新しき民謡に就て」(『日本詩人』大正十一年十月)の一節であるが、〈安価なる〉〈浅薄なる〉〈時代錯誤〉とはまことに毒々しい評言ではある。一体、白鳥をしてこのような批評を書かしたものはなぜか。長谷川等伯作「松林図」屏風の世界に、当代の流行が生んだ、つまり経済効率と近代林政の欠陥の上に浮き上がった新しい風景としての落葉松を対応させた、いわば「松林図」屏風のだまし絵の如き詩作は、やはり白鳥のような批評を招く毒を持っていたといわねばならない。

## 落葉松

### 一

からまつ林を過ぎて、  
からまつをしみじみと見き。  
からまつはさびしかりけり。

たびゆくはさびしかりけり。

(以下略)

以後、白秋は「落葉抄」(『中央公論』大正十一年一月)、「短章」(『明星』大正十一年三月)で落葉松をモチーフとした作品を発表し、『明星』大正十一年四月に、白秋はへわがうたのふかきころは／ほとほとに知る人ぞなき。／昼見えぬ星といふとも／つくづくと見れば光るを(「わがうた」第一章)を書いているが、こうした孤独感と落葉松の存在性への認識とは表裏一体だったと思われる。おそらく「へさびし」とは落葉松に象徴させる近代性を生きざるを得ないという思いから発する。自然でありながら人工、姿は閑寂でありながら経済効率という猥雑さと山林荒廃の証しでもある。この背反する二重性を体現し立ち続ける落葉松は表層のレベルでは中世の幽玄的世界とも見まがうものとして表われながら、実は当代においてもっとも新しい景観であった。

白秋はこの背反する二重性を、日本近代の林政によって抱え込まなければならなくなった落葉松の存在を自己とクロスさせながら読み解くのだ。だからこそ、白秋は「へさびし」という詠嘆を手がかりにして、この日本近代が生んだ奇妙な存在性に向け、白鳥の〈時代錯誤〉という激しい批判を誘発する文語表現によって発語しているのだ。つまり、白秋は近代詩の流れに逆行する表現様式を用いることで、日本近代を批評していたわけなのである。

「わが思ひ浅間が嶽の麓なる落葉松の木が知るよしも無し」と詠ったのは与謝野晶子だが、白秋は当代に出現した森林景観を通して、だまし絵のごとき日本近代をみつめているのである。

## 注

- (1) 鈴木正節『博文館『太陽』の研究』昭和五十四年五月、アジア経済研究所刊  
(2) 『大日本農会報』明治二十六年一月

号

(3) 「横井時敬論」村上保男『日本農政学の系譜』昭和四十七年三月二十日、東京大学出版会刊

(4) 伝田功『近代日本農政思想の研究』(昭和四十四年八月十五日、未来社刊)

には「当時横井をはじめとくに駒場農学校の出身者たちは、老農者によってになわれてきた慣行農法、経験農法を、ドイツの農芸化学を中心とする農業技術と結合せしめることにより、水田農業を主体とする小農経営に適合した日本的な小農技術を生み出していた」という指摘がある。

(5) 「横井時敬の農本主義」網沢満昭『日本の農本主義』平成六年一月、紀伊國屋書店刊

(6) 井上馨のこと。

(7) 『近代日本農政史』昭和二十二年九月、世界書院刊

(8) 肩書は東京農林学校教師独国プロフェッソル。

(9) 『開墾地移住経営事例』(昭和二年刊。本文は桜井武雄『近代日本農政史』(昭和

和二十二年九月、世界書院刊)に拠った。

『野依雜誌』大正十一年二月号には、「秋、西那須野なる三島氏の農場を訪づれて」というサブタイトルを持つ前田夕暮「農民小舎十一首」が掲載されている。

水霜のふりたる朝の農場のすがしき空の朝日子のかげ  
煤けたる農民小舎の荒壁に鎌一挺かかり  
いろいろすみにけり

(10) (9)に同じ。

(11) 都築省三『村の創業』(大正六年六月、実業之日本社刊)には北海道に開拓された徳川農場の試行錯誤が活写されている。

(12) 寺山義雄『農政秘史 あの時この人』(昭和五十四年十一月十五日、楽游書房刊)に、左のような記載がある。

寺山義雄「蚕糸業は外貨獲得の有力産業で、第二次世界大戦の直前まで続いた。小倉武一「福沢諭吉は明治二十年代だと思うが『米はやめて養蚕一本でいくべきだ』といっている。

(13) 横井時敬は『第壹農業時論』(明治

三十八年八月、読売新聞新社刊)の「現今の農業政策」において農商務省の放任政策批判を展開。当代の自由貿易(田口卯吉)と保護貿易(犬養毅)の論争は村上保男『日本農政学の系譜』(昭和四十七年三月二十日、東京大学出版会刊)の第一節「横井時敬論」に詳述されている。

(14) 『太陽』誌上の農業情報を受容することで立ち現われる農民像として、小島貞一「孤独は耀く地上に」(『日本詩人』大正十一年七月号)が想定され得るかも知れない。引用は同詩の第三連である。この耕人は華奢にして肥桶の類を担がない

自然化学を応用し 空中無尽蔵の肥料  
を乾溜し田畑に散布する  
また樹間の蜘蛛の巣を アンテナに利用し

我が創見の無線電信機を装置し 世界の文明智識と日々に談話する  
ベルグソン オイケン ブラウニング  
のお爺さん達に

『お早う』を交換する  
黎明を歌うは純白のミノルカ種 その



高らかなる提唱に目覚めて 噴井の  
青冷に嗽ぐ

そこに建てられあるは玻璃製の小建築

アスパラカス<sup>(マ)</sup> 棕櫚竹 羊歯の類は

鬱<sup>(マ)</sup>荘として繁茂し 涼涼たる軟風に

戦ぐ

(15) 横井時敬「農業資本に就きて」(『太陽』明治二十九年一月一日)。

(16) 〈近年各地水害頻りに至る、性命<sup>(マ)</sup>を亡失し、財産を蕩尽するそれ幾何そや……付加随従暴威を逞ふせしめたるものは森林の濫伐与かつて力あることは疑ふべからざるの事実なり……森林と水害とは殆ど微妙なる關係を有せるものにして、周到なる森林の造設は、以て其災害を薄からしめ、若くは之をして皆無に帰せしむるに足るへし〉。

(17) 二つの論文を集大成したものが、法学士某の「森林制度改革新論」(『太陽』明治三十五年五月五日)である。

(18) 高橋松尾『カラマツ林業総説』(昭和三十三年三月、日本林業技術協会刊)に落葉松の伐採量が記されている。それに拠れば、明治末から大正初期には年産

五〇六万石、やがて十〇二十万石に増産され、大正末期には四十万石になっている。

(19) 軽井沢を訪れた西条八十「軽井沢日記抄」(『新文学』大正十年八月号)、室生犀星「初秋雜筆」(『改造』大正十年九月号)の第二章「軽井沢印象」には落葉松に関する記述はない。ちなみに明治四十年八月執筆の幸田露伴「軽井沢」、明治四十五年夏に軽井沢を訪れた印象を記した正宗白鳥「軽井沢と私」(『群像』昭和三十三年十月号)も同様である。幸田露伴の娘・文が大正初年代に浅間山麓の池西庵における避暑生活を作品化した「山荘」(『知性』昭和三十一年十月号)には、△二軒のまはりといふものは松・から松の三十年以上の深い植林に囲まれて……山気の静寂下——といった感じである。……でも、都会育ちの若いきやうだいいは静寂がかなりひどい圧迫になつた」と記されている。

(20) 〈沓掛駅から数丁行つた山の中に温泉があつて、その温泉の湧く、落葉松の多い山の腹に広く地ならしなどせず〉。

(21) 『明星』以外に発表された詩に山口宇多子の「そよかぜは語る」(『野依雜誌』大正十年六月号)がある。〈そよかぜよ／さざめきと共に平地を渡るそよかぜよ／お前の爽快な接触と共に残して行く／溶け合つた無数の柔和な花の薫／又落葉松や小川の薫〉(以下略)

(22) 『日本文学教養講座Ⅲ 近代詩』昭和二十五年十月、至文堂刊。